

ジェンダーなのか文化なのか 文化人類学にとっての難問

Seeing Gender or Culture? Conundrum for Cultural Anthropology

松岡悦子(奈良女子大学大学院生活環境科学系・教授)
Etsuko Matsuoka (Nara Women's University)



文化人類学とジェンダー論

私は 1970-80 年代にかけて、大学・大学院で文化人類学の教育を受け、文化人類学の見方を身に付けてきた。だが 2008 年に奈良女子大学に移ってから現在までは、文化人類学ではなくずっとジェンダー論を担当してきた。その間、さまざまな場面で人類学とジェンダー論の見方の違いに出会い、時に居心地の悪さを感じることもあった。といっても、私が学んだ 30 年前と現在の文化人類学とは大きく異なっている可能性もあるが、とりあえず私が感じた人類学的アプローチとジェンダーアプローチの違いを表 1 に示す。

表1 人類学的アプローチとジェンダーアプローチ

人類学的アプローチ	VS	ジェンダーアプローチ
文化相対主義		
文化を批判しない		批判、価値判断する
記述的		規範的
権力関係を見ない		権力関係を見る
文化を尊重		文化を変えたい

まず人類学の基本的な考え方に、文化相対主義がある。文化相対主義とは、文化に優劣をつけない、他者の文化を批判しない、自文化の基準で他者の文化を評価しないという考え方だ。文化人類学では多様な文化のことを文献で読んだり、調査して記述したりするが、その文化がどうあるべきか、また何が正しいかという規範的なことを言わない。たとえば、人類学者の Shweder は次のような例をあげている。インドのオリヤブラーマンは、夫に内緒で映画を見に行った妻を殴るのは悪いと思わないが、寝ている犬を蹴っ飛ばすのはよくないと考えている。また、息子に娘より多くの財産を相続させるのを悪いとは考えないが、列に割り込みをするのは悪いと考えると述べている(Shweder 1990)。このように道徳観は文化によって異なるのであり、文化相対主義の立場に立てば、それに対して良い習慣や悪い習慣という価値判断をしてはならないことになる。しかしジェンダー的なアプローチ

であれば、妻が夫に殴られることや、男性の方がより多く相続することは、女性が男性より低い地位に置かれていることで、不平等の表れだと見なす。つまり、文化人類学はそこに男女の権力関係を読み取ろうとせずに覆い隠してしまい、あたかもそれが昔からの伝統であるかのように述べることで、歴史的な変化や政治的な面を見ないようにしてしまう。文化人類学では文化を尊重することを学び、ジェンダー論では男女不平等を変えてより公正な世界をめざすのを正しいと考える。

現代社会ではジェンダー公正が正しいあり方とされ、とくに女子大学ではジェンダー平等を授業で強調するが、現実の世界ではジェンダー公正の見方が世界の普遍的な価値になっているとは言えない。これは、文化人類学がジェンダー平等をないがしろにしているということでもなければ、私がジェンダー論的見方を支持しないということでもない。ただ現実には世界の情勢(テロが発生する状況やさまざまな価値観の対立)を見渡したときに、ジェンダー平等が共通の世界認識にはなっていないということである。具体的には honor killing やレイプ、早婚などの男女差別的な慣習がたくさん見られることは、地球上のすべての人々が、通常フェミニズムで学ぶようなジェンダー平等を支持しているわけではないことを示している。

ジェンダーの概念

文化人類学は、異文化でフィールドワークをすることが多いが、私はインドネシアやバングラデシュなどのアジアで調査をすることが多い。そこで現地の女性たちが従属的な扱いを受けていると感じることがある。そのように感じるのは、私自身がジェンダーの視点を身につけているからでもあり、また文化相対主義的立場をとり、規範的な見方をしないでおこうと思いつつ、規範的見方をしてしまっているからと言えよう。つまり、私自身が価値判断をしないでおこうと思っても、ジェンダー的見方に立ち、規範的な見方を持ち込んでしまっている。そこには、進んだ国と遅れた第三世界という関係も前提とされているのかもしれない。このように考えると、インドネシアやバングラデシュの女性を従属的な地位にあると見る視線は、そのまま日本を含むアジアの女性を「抑圧された存在」と見る西洋の視線に重なるように思われる。そして、アジアの女性との対比の上で西欧の女性は「自律的な存在」という意味を与えられることになる。西欧から見たときに、アジアの女性は一律に第三世界の女性として表象されるけれども、第三世界の女性は単一ではなく、その中にはさまざまな差異がある。それにもかかわらず、西欧の自律的な自己を規範として、一律に第三世界の女性として表象されることに対して、第三世界出身のフェミニストたちからの批判がある(ナーラーヤン 2010、モーハンティ 2012)。

現在私たちが学ぶジェンダー論が西欧生まれの学問で、ジェンダーの概念が西欧を規範として作られた概念だとすると、それは普遍性を持つ概念なのではなく、西欧生まれの *ethno-concept* だという見方も成り立つ。そして、仮に世界の 80%の人にとって、ジェンダーの概念が意味をもたないとしたら、ジェンダーアプローチは西欧の一部の人々の考えを反映した概念であり、それを世界中に適用しようとするのは帝国主義的な見方になるのだろうか。このようにジェンダー概念を相対化することは、ジェンダー平等をめざす運動と逆行する点で、とんでもない時代錯誤の考えのように思われる。

だが、もう少しジェンダーの概念について考えてみたい。ジェンダーは、人種、階級、国籍、性的指向などの人を分けるときに切り口の一つである。そして、これらの切り口は絡み合って抑圧の構造を作り上げている。たとえば、ヴァレリー・ブライソンが次のような例を挙げている。ここに非合法中絶をしたために大量出血をして、死にかけている女性がいるとする。この女性は、女性であるがゆえに中絶を受けたという点では、ジェンダーによる抑圧を理由としてあげることができる。しかし、彼女が貧困でお金がないために非合法中絶を受けねばならなかったとすれば、それは階級のせいだとも言える。あるいはこの女性が黒人であり、病院に行くと不妊手術をされることを恐れて病院に行かなかったのだとすれば、人種が大きく影響したことになる(ブライソン 2004: 82)。このよう

に考えると、ジェンダーだけが特別なわけではなく、抑圧を作り上げる要因は複数あると言える。

また、ジェンダーが男女という2項対立的な概念ではなくスペクトラムであり、連続的な概念だという主張もなされている。BBC ニュースに、「I'm 70% man」という Richard O'Brien という劇作家についての記事がある (Fidgen 2013)。ジェンダーがそのように連続的に変化するものならば、ジェンダーは固定的ではなく流動的である。

また、図1は韓国のアハ青少年性文化センターのトイレのサインだが、これは性が連続的に変化するものであることを示している。また、性の境界を越えることが今後もっと容易になっていけば、男性的、女性的要素をさまざまに含む多様な人たちが存在することになり、ジェンダーは流動的で移行可能なものとなる。



図1 アハ青少年性文化センター(韓国)のトイレのマーク

[左端の水色から右端の赤色へ黄色を経由するグラデーションの配色になっている]

ジェンダー論と人類学の接点

このような状況のなかで、人類学とジェンダー論はどんな付き合い方をしていけるのだろうか。ここで私自身を例にとるならば、アジアでフィールドワークをするときには、日本の人類学者として、日本という位置から西欧とフィールドの両方を視野に収めることになる。そこでは身につけたジェンダー概念を一方に持ちつつ、他方でフィールドを理解しようと、西欧と第三世界の両方の視点を行き来しながら、両者を共通に理解できる視点を探ることになる。つまり、私自身の中でジェンダーアプローチと文化人類学的アプローチが矛盾を来さないように、両方を等しく見渡せるような視点を見出そうとするのである。

では、両方の視点に共通するのはどのような点なのかと言えば、どちらも個々の女性が置かれた文脈を理解し、その女性の視点を重視することではないだろうか。文化人類学は、個々の女性の置かれた文脈をミクロに理解しようと、ジェンダー論も女性の置かれた文脈から抑圧の構造を読み解こうとする。いずれも、文脈を重視し、個々の女性の状況をミクロに理解しようとする点が共通している。

リプロダクションとジェンダー

では、次に私がテーマとしているリプロダクションを例にあげて、ジェンダーやその他の要因がどのように絡み合って、リプロダクションの現状を作り上げているかを具体的に見ていきたい。リプロダクションの領域は、ジェンダーの視点が一つの答えをもたらさない、つまりそこに抑圧を読み取ることもできれば、女性の力の源泉を読み取ることもできる議論の多い場、別の言い方をすれば両義的な場だと言える。そういう意味で、リプロダクションでは個々の文脈が重要になってくる。

たとえばピルは、女性の性的自由や自律性を助け、女性のエンパワメントにつながる側面をもつと同時に、ピルを飲むことで男性を避妊の負担から解放し、女性のみが避妊の責任と健康被害を負う点で、女性にとっては抑圧的な側面をもっている。

また出産の場において、麻酔を使って陣痛の痛みをとることは西欧ではごく一般的なことで、鎮痛剤や麻酔を用いずに出産するのは勇気のいることとされている。出産において痛みをとることは、男女平等の権利を主張す

ることにつながるという考えは、ヨーロッパで参政権運動が盛んだった第一波フェミニズムにおいて、選挙権を要求する女性たちと、出産に麻酔を要求する女性たちが重なっていたことに現れている。女性が痛みを感じずにすむことは、女性が男性と同等に扱われることを意味していたのだ。だがその一方で、日本では、あるいは欧米でも麻酔に頼ることは女性を医療に依存させることになり、女性の産む力を奪うものという見方がある。出産を無痛にすることが、女性の権利を強めるのか弱めるのか、答えは一つではないと言える。

帝王切開による出産も同様の議論を産み出している。帝王切開は女性の命を救うこともあれば、過剰に行われることで女性の身体が不必要に切られ、健康被害をもたらすことにもなる。

生殖技術も、ゲイやレズビアンの人たちが家族を作るために、また多様な人生の選択肢を手に入れるために利用するのはエンパワメントにつながる。しかし、日本や東アジアにおいて、家の跡継ぎとなる子どもを持つために女性が不妊治療を受けざるを得ないとするならば、生殖技術は家父長制を維持し強調するための技術になる。

以上のように、リプロダクションは文脈によってその意味付けは大きく変わる。

リプロダクションに働くさまざまな力

では、さらに女性の身体を中心に置いて、そこに医療、資本主義、家父長制、国家の政策がどのように影響するかを、いくつかの国を例にあげて見てみたい。現代のリプロダクションにおいては、ジェンダーつまり家父長制の影響だけでなく、グローバルな資本主義や医療が国家の政策と手を携えて、女性の身体に大きな影響を与えている。したがって、ジェンダーや家父長制の視点だけでリプロダクションをとらえることはできないことを、家族計画、出産、産後のそれぞれの側面で見していきたい。

まずスハルト時代のインドネシアの家族計画を例にとる。インドネシアでは家族計画は国の開発政策の重要な柱であるが、もっぱら既婚女性を対象にしており、未婚女性や男性はターゲットになっていない。このことは女性にとってプラスマイナス両面を持っている。ホルモン系の避妊薬を用いるのは女性で、副作用も女性に集中するが、それは健康被害と見なされずに、妻の身体になるための学習期間、身体が慣れるための期間と見なされている。その一方で、未婚女性に避妊の知識が伝えられないため、高校生で妊娠して学校を中退する女性もいる。女性の身体は国家が近代化に移行するための政策を実践する場となり、既婚女性は避妊をしているかどうかを家族計画の役人から常時モニタリングされ、かつ村落部では女性どうしが互いにチェックしあう状況が見られた。だが、こうした相互監視とも言えるやり方に対する女性自身の抵抗や自己主張は弱かったと言える。

次に出産をバングラデシュの農村部(調査地のマダリプル県)で見えていくと、現在妊婦健診を4回受けることが義務化されるようになり、さらに民間のクリニックで胎児の超音波診断画像が見られるようになった。これまで女性たちは、医療とは無縁に自宅に伝統的産婆を呼んで出産していたが、今では医療と接触する機会が増え、高いお金を払って超音波の写真を撮りに行く女性とそれができない女性たちの差が顕著になっている。村の郡病院の帝王切開率は3割で、村の近くのマーケットには民間のクリニックやショッピングモールができつつある。そのようなお金の循環を支えているのが、海外やダッカへの男性の出稼ぎ労働による送金で、医療化と資本主義化が農村にも入り込み始めている。

次に台湾と韓国の産後の習慣を見ると、東アジアでは女性は産後の一定期間に特別の食事や安静を守る習慣がある。現在は、この伝統的な産後の休息期間と商業化が結び付き、豪華な産後ケアを受ける女性たちが増えている。一見女性の身体や健康を重視するように見えるが、その背景にあるのは女性の身体を次の子が産める身体にするという家父長的な考えであった。また台湾でも韓国でも、出産に帝王切開などの医療介入が増えたために産後の回復に時間がかかるようになり、産後ケアがこれまで以上に必要になった面がある。そし

て、産後ケア施設が病院に隣接しているところでは、産後にも医療が提供されるようになり、医療化は妊娠と出産だけでなく産後にも広がるようになっている。また現代の女性たちにとって産後の養生は、かつてのような女性の妊娠力を維持するためであるよりは、台湾では元の体型を取り戻して仕事に復帰するためであり、韓国では将来の病気を予防し、美しさを取り戻すためとされている。台湾でも韓国でも、医療を用いて女性の身体をより美しく、かつ仕事に戻れるように整えることを目指しており、家父長的な考えと資本主義と医療がうまく手を携えた姿が見られる。

日本ではリプロダクションに関する政策の関与は比較的小さく、リプロダクションは産婦人科医を中心に組み立てられている。また日本の産後ケアは、女性がゆっくり身体を休めるためであるよりも、女性が赤ん坊の世話の仕方を学んで母子の絆を作るためであり、女性中心ではなく子ども中心の発想になっている。さらに日本では、産婦人科医（大半が男性）と助産師が家父長的な家族のような関係を作り、女性にパターナリスティックなケアを提供している。そういう意味で、日本では資本主義、医療、家父長的関係が弱い結びつきを作り、女性たちはそれに対抗するよりもその中で守られることを期待している。

このように、リプロダクションにはジェンダー（家父長制）以外にもさまざまな力が働いており、ここでは国家、医療、資本主義という側面から考察した。アジアのリプロダクションを通して見えてきたのは、資本主義と医療が強く結びつき、ときに国家の政策がそれを後押しする形で、いずれも女性の身体をターゲットにしていることである。資本主義と医療の結びつきはどの地域でも強力だが、韓国や台湾では女性たちはそれらに抵抗するよりも、むしろうまく利用して自らの価値を上げることを重視していた。また、女性が医療や資本主義、国家に対抗して自分たちの身体や人権を守ろうとする女性運動の力は、アジアでは欧米と比べてかなり弱い。台湾や韓国では、女性たちは医療を積極的に用いて、それによってより美しくより高収入の労働力となることを目指しているし、日本では国家の政策は弱い代わりに、産科医どうしつまり男どうしのつながりが強く、助産師を含めたハーレムの、あるいは家父長的疑似家族が作られている。医療と家父長制と資本主義は、互いに協力し合って女性の身体をコントロールしている。

ジェンダー概念の有効性

さてこのような状況のなかで、ジェンダー概念が日本研究において有効なのかということであるが、ここでは日本研究だけではなくアジアや第三世界も含めて考えたい。というのは、西欧生まれのジェンダー概念が日本を含む非西欧においても有効かというふうに考えるからである。たしかに、家父長的な考えがローカルなルールや道徳になっている地域に、ジェンダーの概念を当てはめることはジェンダー帝国主義と見ることもできよう。また、ジェンダーの概念を用いない人々が地球上に数多く存在し、西洋的なジェンダー概念が普遍的な価値になっているわけではないことも事実である。さらに、ジェンダーだけが大きな権力ではないことは、リプロダクションに働くさまざまな力を見ることで明らかになる。ここでは、規範的にどうあるべきかよりも、まず現状がどうであるかを記述している。私は、現状ではジェンダーという概念が世界の共通概念になっていないからといって、ジェンダー概念が有効でないと言いたいわけではない。以下にその理由を述べたい。

まず、人権（そこには女性の権利も男性の権利も、男女を問わない人たちの権利も含まれる）を重視する上で、ジェンダーの概念を用いて不平等に置かれている人の力を強めることができる。たとえば、リプロダクティブ・ヘルスやライツのこたばを用いることで、リプロダクションにおける女性の人権や自己決定権を中心においた議論をすることができる。現実には多くの文化で女性の身体は国家や医療、資本主義や伝統文化の支配下にあるが、それらを乗り越える手段としてジェンダーの概念を用いることができる。弱者にとって、より普遍性をもつ概念はエンパワメントの手段となり、ローカルな文脈を乗り越える方策となる。仮にローカルな文脈が女性を劣位に置くもの

だとしても、それを越えるためにジェンダーの概念を用いて、平等や公正という議論をするためのとっかかりとすることができる。

また、現実に関世界中で起きている問題のいずれもが西欧と第三世界の両方にまたがっていることを考えると、第三世界の問題は西欧の問題であり、世界全体を含めた共通のルールがなければ議論の基礎を築くことができず、問題解決に至らない。大量の移民の存在や、臓器移植や生殖医療を求めての国境を越えた人々の移動、家事労働者の移動などは共通のルール作りの必要性を示している。従ってジェンダー概念が個別の文化になくても、すでに欧米では重要な概念になっている以上、個別の文化を越えた共通のルール作りに際して無視することはできないだろう。少なくとも西欧ではジェンダー概念を元に社会が構築されている。西欧の中に非西欧が流れ込み、その逆も生じている現在、両者の接点を見だし、共通の基盤を作ることが不可欠である。人類学はローカルと普遍との間を行き来することで、個別と普遍の両者を橋渡しできる立場にある。ローカルな文脈を理解しつつ普遍性の高い概念を用いてより多くの人々が一致できる基準を持つことが必要となろう。

以上のように、非西欧においてもジェンダーという概念を用いることは弱者の力を強める上で有効であり、また人類に共通のルールを築く上で、もはやジェンダーを組み込まない議論はできなくなっている。ただその際に、個別の文脈を無視することは危険であり、人類学は個別の文脈と普遍性との間を行き来することで、ジェンダー概念をより柔軟で広汎なものにするのに貢献することができるだろう。

【文献】

ナーラーヤン、ウマ 『文化を転位させるーアイデンティティ・伝統・第三世界フェミニズム』塩原良和監訳、法政大学出版局、2010年

ブライソン、ヴァレリー 『争点・フェミニズム』江原由美子監訳、勁草書房、2014年

モーハンティ、チャンドラ『境界なきフェミニズム』掘田碧監訳、法政大学出版局、2012年

Fidgen, J., "Richard O'Brien: 'I'm 70% man'", *BBC News*, 18 March 2013

Available at: <http://www.bbc.com/news/magazine-21788238> (accessed February 18, 2016)

Shweder, R., "Ethical Relativism: Is There a Defensive Version?" *Ethos* 18(2): 205-213, 1990